

日本映像学会第 37 回大会第 1 通信 大会実行委員会

今回の大会テーマは、「イメージの虚実」(仮)です。これは、古い問題ですが、しかし常に時代ごとに更新され、とりわけ今日では頻りに問われ、我々を悩ませもする映像全般に関わる問題でもあります。

例えばフィクションとドキュメンタリーを区別しようとする、ドキュメンタリーにも物語性が発生してしまうという問題が持ち上がり、また、フィクションのほうがドキュメンタリーよりも「実」「真」を表現しうる場合も多々あります。これは、両者の区別が困難であることはもちろんのこと、イメージの真偽や虚実が様々なレベルで思考されうることを示しているでしょう。ロラン・バルトが写真の本性として語ったように、被写体が「かつてそこにあった」ことは否定しがたく、何らかの現実的なものがフィルムを装填したカメラの前に置かれたことの「真正性」は無視できるものではありません。しかし同時に、カメラの前に置かれるのが、あらかじめ仕組まれた演技であることもあれば、前もって描かれたセル画であること(アニメーション)もあり、「かつてそこにあった」を拠り所にするだけでは見えてこない複雑な真偽の交錯があることも確かです。

ところが、今日のデジタル・メディアの発達は、「データ」というタームにも見られるように、「イメージの虚実」に纏わる曖昧さあるいはいかにかわしさを、これまで以上に増幅させています。

いずれにしても、イメージが遭遇してきたこれら様々な事態が示しているのは、単にすべては虚構だと片づけてしまえるということでもなければ、ひたすら生の現実を追い求め、それに拝跪すればよいということでもありません。むしろそれは、物語性やフィクションといった概念の再定義を要請し、またそれとの関係で、リアルや現実に対する姿勢の再考を促すものでもありましょう。ことによれば、虚構こそ「実」であり、「真」は常に自らを裏切る「偽」でなければならないというような局面への思考にもつながっていくかもしれません。

映画・写真を問わず、虚／実、真／偽、ドキュメンタリー／劇映画、実写／アニメーション、フィルム／CG、アナログ／デジタル……イメージはそうした二元的な対立を巻き込みながら今日に至りましたが、また新たな対立を生み出しつつ進行してゆくものでしょう。第 37 回大会では、上述した問題について様々な分野・視点において議論を深めることができればと考えております。

●大会テーマ

「イメージの虚実」(仮)

- ・会期 2011 年 5 月 28 日(土)、29 日(日)
- ・会場 北海道大学クラーク会館ほか
〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 7 丁目
(JR 札幌駅北口より徒歩 10 分)
- ・tel. 011-706-4020(応)
011-706-3051(横濱)
- ・email eizou37@gmail.com
- ・大会公式ウェブサイト 2011 年 1 月に開設予定
- ・研究・作品発表エントリー
2011 年 3 月上旬 発表申込〆切(詳しくは第 2 通信にてご案内します)

●実行委員会

- 委員長: 応 雄 (北海道大学文学研究科准教授)
- 副委員長: 佐藤淳二 (北海道大学文学研究科教授)
- 委員: 横濱雄二 (北海道大学文学研究科助教)
- 委員: 川崎公平 (北海道大学大学院文学研究科博士課程)



(写真は由緒ある古河講堂。現在も文学部の建物として使用されています。)

△1947 年に北大に法文学部が設置され、1950 年に、法文学部が二学部に分離され、独立した文学部が歩みはじめました。2000 年の大学院重点化大学への移行にともない、大学院文学研究科は思想文化学、歴史地域文化学、言語文学、人間システム科学の 4 専攻 17 講座 1 協力講座による大学院講座制に改組されました。

2005 年に「映像・表現文化論」講座が新設され、新分野としての映像表象文化研究が北大において本格的に始められました。多くの院生を擁する同講座はさらに 2007 年に、学術誌『層—映像と表現』(ゆまに書房)を創刊し、今年で計 3 号を編集発行しています。